

国際開発協力論Ⅱ

元田結花

国際開発協力論Ⅱにおいても、国際開発協力論Ⅰと同様に、筆記試験は実施せず、主に 3 つの小レポートの内容を踏まえて成績評価を行った。レポートはいずれも、教員が提示した「問い」について、授業内容を踏まえて、履修者の考えを 2,400 字程度で論述するものであった。スケジュールとテーマ、点数配分は以下の通りである。

課題 番号	課題 提示日	テーマ	題材 (関連する授業回のレジュメ・配布資料・解説動画 に加えて)	締切	点数 配分
1	10/26	外部者が途上国に介入する際に求められる視点について、各自の考えをまとめる	DVD（制作会社が動画を YouTube 上に公開） 教員が用意した DVD の内容についての解説動画	11/30	31 点
2	12/14	市民社会支援を如何に評価すべきなのかについて、各自の考えをまとめる	DVD（制作会社が動画を YouTube 上に公開） 教員が用意した DVD の内容についての解説動画	1/11	31 点
3	12/21 (*)	全 14 回分の授業の内容を踏まえ、ガバナンス支援の基礎となっている考え方について、各自の考えをまとめる	学術論文	2/2	33 点

* 第 14 回授業が 1 月 17 日であることを踏まえ、受講生が冬休みを有効活用できるよう、早めに課題を提示

3 つの小レポートに加えて、全 14 回の授業を通じて、特に興味を持ったこと・新たに学んだことについて、200 字程度でコメントを用意し、第 3 回課題レポートと合わせて提出するよう求めた。こちらについては、条件に合致する形で提出する限りにおいて、5 点を必ず付与した。

各レポートの質問の趣旨や、その質問に答えるために求められる知見については、レポート課題を提示した授業回（予習・復習用の解説動画の内容を含む、以下同じ）およびレポートの題材となる英語の動画について日本語で補足した解説動画において十分に説明してあるので、ここで改めて説明することはしない。換言すれば、授業に出席し、指示に従って予習・復習をこなせば、出題の趣旨に即したレポートが執筆できるようになっている。

また、受講生が、正しく出題意図を理解し、授業で学んだ内容を適切に援用してレポートを用意できたかどうかを確認できるよう、希望者には、Zoom を用いる形で、提出期限後にフィードバックを与えることとした。実際に個別に指導を受けた学生は、この機会を活用して、出題意図を確認するとともに、関連する授業内容を改めて学び直すことにつながった。

第 1 回・第 2 回課題レポートについては、問いで要求された各点に沿った形で、題材となる動画および該当する授業回から入手できる情報を、的確に整理できているものが多かった。但し、第 2 回課題レポートでとりあげた「ポスト開発」の議論については、不十分な分析にとどまったものが多数を占めた。第 3 回課題レポートについては、該当する授業回から入手できる情報を考慮すること

なく、指定した学術論文の内容のみに基づいて書かれたものが散見された。成績評価の一環として課題文献を指定した形でレポートを課すには理由があり、授業内容を踏まえた上で課題レポートに取り組む必要性を改めて指摘しておきたい。また、授業において示された見解が、必ずしも題材として指定した論文と同様の見解に基づいているとは限らないことに注意されたい。両者の見解を理解し、必要に応じて比較した上で、受講生の考えを述べることが求められる。

なお、受講者自身の見解については、「依拠すべき立場」があらかじめ決まっているわけではない。根拠を持って提示されているかどうかが重要となる。その際、ある立場を選択すると、自ずと関連する論点においてもどの立場を選択するのかが決まってくるはずである。しかしながら、そのような意味での「議論の一貫性」が維持できていたかどうかという点については、疑わしいものもあった。断片的な知識の寄せ集めに陥ることなく、体系的に理解することを意識してほしい。

授業のコメントについては、どのような内容に受講生が関心を持ったのかが率直に書かれており、教員としても興味深く読んだ。